第153回直木三十五賞受賞記念　東山彰良さん講演会

本の中の時間の流れ

受賞作『流』の話や東山さんが小説を書き始めるまでの話、また小郡のことなど、ユーモアを交えてお話しされ、会場は笑いに包まれながらの講演となりました。今回は講演の内容を抜粋してお届けします。

塚崎（以下塚）：講演会のタイトル「本の中の時間の流れ」は東山さんが考えたんですか。

東山（以下東）：はい。最近は世の中の時間の流れの速さについていけないところがあって。例えば、昔は文通するとなると手紙を書いて返事が来るまで、短くても一週間から10日くらいはかかっていたと思います。昔は世の中がそういう時間の流れの中にありました。初めてEメールを使ったときに、その瞬時性に度肝を抜かれました。これで世の中はいよいよスピード的に極まったかなと思ったら、最近ではLINEなんていうものまであって、メールなんかよりレスポンスの速度が求められる時代になっているような気がします。ただ、世の中がそういう風にどんどん加速していっても、いくつかの場面での時間の流れは、絶対変わらないものがあると思います。その一つがおそらく本を読む時間です。今も100年前も一冊の本を読む時間はそれほど変わらないはずです。僕は今この場に集まっていただいた方にそういう「本の時間の流れ」を少し思い出してもらえたらなと思っています。実際、『流』の中では、1975年が舞台なんですけど、こういった時間の流れも意識して書いたので、講演会のタイトルをこのようにつけました。

塚：台湾の青春物語『流』がこうやって日本の読者にこれだけ受け入れられているということについて、どういう風に感じていますか。

東：僕は英米文学や南米の小説をよく読むんですが、アメリカにも行ったことがなければ南米にも行ったことがないんです。でも、やっぱり良い作品を読むと、ノスタルジーをかき立てられることがよくあります。主人公は僕とは全然関係のない生活環境にいるのにも関わらず、なんかこの情景は知っているなとか、こういう経験はしたことがあるって思えちゃうんですね。『流』を書いているときに、自分がきちんと描き切れば、台湾が舞台で、台湾人の少年が主人公で、しかも日本のことがほとんど出てこない小説であっても、きっと日本の読者に受け入れられるとは思っていました。ただ、自分にそのレベルの小説を書ける筆力があるかどうかはわかりませんでした。だから、実際に書いて本を世に出して、このように信じられないくらい良い反応を得たというのは、本当に嬉しいし、ありがたいことだと思っています。

塚：音楽が好きということで、小説を書く上でその影響はありますか。

東：物を書くというのは、自分の中にある言葉や、自分でも気が付かなかった物語を捕まえて外に吐き出すという行為なんですが、ずっと吐き出していくと、自分の中にあるストックがだんだん減っていきます。だから常にインプットをしなきゃいけないんですが、それは当然、実体験からくるものもあると思います。例えば、旅行をして感じ入ったことなどが自分の中に蓄積していって、それが後々一つの文章につながるような体験になってくれるかもしれません。けれども普段生活しているとそんなにしょっちゅう旅をするわけにもいきません。そうすると僕の場合、その他のインプットの手段が音楽と映画と読書で、その中でも音楽の比重はかなり大きいと思います。

歌というものにはメロディがあって歌詞があります。これを本に置き換えると、歌詞がだいたいストーリーにあたり、そのストーリーに合うメロディというのがその本から醸し出される風格というか、本の行間からにじみ出る味というか、そういうものになってくるんです。僕はいろんなタイプの小説を書きますが、とりわけハードボイルド系の小説を書くときに好んで聞くのは、アメリカのカントリーソングなんです。アメリカの歌手にジョニー・キャッシュという人がいます。彼の歌詞をよくよく聞いてみると、彼の音楽と相まって、非常に僕の理想とする形なんです。例えば彼の歌に『フォルサム・プリズン・ブルース』というのがあります。フォルサム刑務所というのがあって、そこに入ってしまった男の物語の曲なんですけど、歌詞を知らずに聞くと本当にのんびりした穏やかな、むしろコケティッシュな印象すら受ける曲なんです。さっきも言ったように、この曲の部分が本でいう風格の部分です。そういうちょっととぼけた曲にのせて、歌詞の部分でジョニー・キャッシュが歌っているのは、小さいときから銃で遊んじゃいけないよとお母さんに言われていた男の物語で、彼が大きくなって、人を撃っちゃうんですよ。それもただそいつが死ぬところが見たいっていうだけの理由で。それだけ聞くとちょっとすさんだ感じで、やさぐれた感じがすごくしますよね。僕が理想とするハードボイルド小説はそういうことなんです。物語はそういう風に乾いていてやさぐれているんですけど、本を読み終わった後、あるいは読んでいる途中に、読者に感じてもらえる全体的な物語の味というのは、コケティッシュであったり、ユーモラスであったりするのが、僕の理想とするハードボイルド小説です。

塚：小郡に住んで20年くらいということですが、生活者としてこの街の良さは。

東：この街で僕が一番好きなのは図書館です。図書館の前の緑のある環境や、司書の方々にこういう本が読みたいと、割と無理を言っても取り寄せてくださるところが良いです（笑）これはもう絶対読めないだろうという本でも、大抵どこかから見つけてきてくれるので、自分で見つけきれない本は図書館にお願いしてます。小郡の図書館は本当に使いやすいです。残念なことは、昔、消防署の辺りにあったプールがなくなったことです（笑）三国が丘辺りにも昔プールがありましたけど、そこもなくなったから、どこで泳げばいいのか（笑）ですので、小郡にはぜひプールを！（会場笑）

塚：東山さんが考える読書の喜びとは。

東：僕にとって読書をゆっくりできる時間があるというのは、それだけですごく贅沢なことです。心が落ち着いてなかったり、他に心が囚われていたりすると、物語の世界に入っていけないんですよね。なので一冊の本を読んで、それがすごく楽しいと思ったときには、その本自体の力ももちろんあるけど、自分の今の環境も影響しているんです。心静かに本が読める状態でなければ、本は読めませんから。それがわかっていると、読書をするときの一つの目安というか、自分の今の状態のバロメーターになるんじゃないかと思います。

また、よく読者の方にひとこと伝えたいことはありますかと聞かれますが、特に僕の方から皆さんに自分の本をこう読んで欲しいとか、このメッセージを読み取らなきゃだめなんだということは一切ないです。本というのは読者のもので、100％それは間違いないんです。一番幸せな読書体験というのは、例えば『流』は台湾が舞台で台湾人が主人公なんですが、そのような物語でもご自分の方にずらして読んで、例えば昭和もこんな感じだったなとか、自分たちの子どものころはこうだったなという風な読み方ができたときに、一番幸せな読書体験が得られると思います。ぜひご自分の読みたいように、心を落ち着けて、秋の夜長に『流』を読んでください（会場笑）

▲小郡市の文化向上と読書活動の推進に貢献したとして、市で初めて市長特別表彰が贈られました